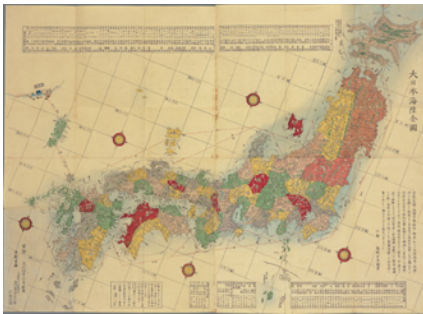


江戸時代の日本図

日本図とは日本全体を描いた地図のことです。江戸時代までは行基図と呼ばれる初歩的な地図しかありませんでしたが、江戸幕府がその支配のために各藩に国絵図製作と提出を命じて以降、同図を繋ぎ合わせた日本図の作製は盛んになり、また武士ばかりではなく生活に余裕のできた町人にも地図が普及していきました。

一方、ヨーロッパ人の地理的視野は大航海時代を通して広がり、マルコポーロの『東方見聞録』の影響もあって東アジア、特に「黄金の国ジパング」への関心も高く、多様な日本図が発行されました。

日本人及びヨーロッパ人が描いた日本図の中で、北方地域がどのように描かれてきたかを紹介します。



大日本陸海全図 恵比壽屋庄七
元治元(1864)年 73×100cm 木版手彩色

緯度経度線や日本列島の形から、長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」の模刻版の1つと思われますが、蝦夷を追加して描いているのが特徴です。また、図の周辺には江戸から各地への陸地と海上の距離が里数で記され、日本周辺の赤線は航路用に方位を示していることも赤水版にはない事項です。

すでに伊能忠敬の測量に基づく日本図は、文政4(1821)年に完成していましたが、幕府の秘図とされていたため、赤水の「改正日本輿地路程全図」はこの後も明治元(1868)年まで同様の模刻版が発行されています。



日本図 ケンペル/ショイヒツター
享保12(1727) 43×52cm 銅版手彩色

東インド会社の任務で日本に滞在(1690~1693)したドイツ人医師ケンペルの地図を基に、スイス人医師ショイヒツターが作成した地図です。

日本は68州に分けられており、漢字表記の国名が読みとれます。また、図の左上に2つの地図がありますが、左側はカムチャッカを、右側は本州北端と蝦夷南端を表記してあり、その隣には磁石の下に日本から世界の主要都市への距離が書かれています。下方には右から七福神の内の大黒・恵比寿・福祿寿を描いて日本らしさを表現しようとしています。福祿寿はターバンを巻いています。

近現代の外邦図・地勢図

外邦図は、軍事的な目的などから、旧日本陸軍参謀本部及び陸地測量部が作製・複製した日本領土以外(外邦)の地図です。また、現代の地勢図は、国土交通省国土地理院が発行する地図で、縮尺は20万分の1、全

国を130面でカバーしています。

今回の展示では、展示枚数の関係上、北方地域の中の北方四島を中心に展示します。また戦前の海図も展示しますので、比較をお楽しみください。



外邦図・択捉嶋 大日本帝国陸地測量部
明治42(1909)年 38×49cm 縮尺100万分の1

択捉島北約半分と得撫島の南約半分が描かれ、地名も読み取ることができます。



地勢図・安渡移矢岬 国土地理院
大正11(1922)年測量・昭和46(1971)年発行
46×58cm 縮尺20万分の1

大正11(1922)年測量の5万分の1地形図などに基づいて編集された地図です。国後島北方の一部と択捉島南方の一部が描かれています。